

昭和二十二年の春に、父と共に東京に移った。

私の希望を父が受け入れてくれたのだった。取りあえず鎌倉の義兄の実家に身をよせて、毎日就職先を探し歩いたが、私の服装を見て、にべもなく断られることが多かった。当時の私の食事は一日にコップパン一個であった。そのうちに栄養失調症になり顔が膨れ上がってきた。そんなころ、知人が「給料は安いが」と言って横浜YMCAを紹介してくれた。やっと私も働き場所を得た。キリスト教関係なので、ボロを着ていても注意されることはなかった。

そして昭和二十五年、新しく創設された産業復興公団に採用され横浜支部に勤務した。東京にある本部に月一回給料受領に出張することが楽しみであった。あるとき、八重洲口で長い行列があったので並んだら、小井一杯のおジャであったが、それが何ともいえないおいしいものだった。後年、終戦記念日には昔の苦勞を忘れないようにとおジャを作っているが、あのとのおいしさはも

う味わえなくなった。

その後、いろいろな有為転変を経て昭和三十九年に、慈恵医科大学の看護婦寄宿舎の舎監となり、以来二十年間、生き甲斐のある人生を送った。その後、縁あって結婚、今年で二十年が経った。転々と職を変えたが、その都度私は成長してきたことに深い感動を覚えており、引き揚げて来て五十九年、この体験は私から離れることはない。

引揚げ二百五十九日の旅

神奈川県 利根川 スミエ

戦前の生活

私は大正七（一九一八）年十一月八日、高松市宮脇町で生まれた。両親は士族の末孫で、子供の躰は厳格であった。兄弟は男四人女六人で、私は兄弟の中では下の方であった。家の中はいつも笑

い声や泣き声があふれていて、喧嘩をして叱られる子、叱られている子がかわいそうだとそれを見て泣く子、賑やかで明るい家庭であった。子供が多いから、学校に通うようになると毎朝、玄関にお弁当が四個も五個も並ぶことが何年も続いた。兄弟大勢で育ったお陰で人との接し方も自然に身に着いていた。

私は昭和十（一九三五）年女学校卒業後、家事を手伝いながらお稽古ごとに通っていたが、満州事変が始まってからは、出征兵士の見送りや兵士の武運長久を祈って、神社に参拝する日が続いた。四国の玄関口高松港から出征する兵士にお茶を接待するために、愛国・国防の両婦人会が連日動員された。私もそのお手伝いの一人として参加し、「兵隊さん！ ご苦労さま」と心を込めてお茶を差し上げて励ました。

昭和十四年から、私は大阪で酒屋を営む姉のところに手伝いに行った。そして昭和十六年二月、義兄の知人の息子さんが中支で召集解除になって

帰って来たのを機会に、その方と結婚することになった。三月、夫の会社「朝鮮油脂」の新浦工場に赴任した。新浦には当時すでに日本人学校があったが、日本人の家は校長官舎とその隣の私たちの社宅の二軒だけで、周りは全部朝鮮人ばかりなのが心細かったが、日が経つに連れてだんだんと周りの人の笑顔が見えるようになり、やっと朝鮮語の会話とお金の勘定もできるようになったころ、米英との宣戦布告を知って愕然としたが、日常生活は変わることはなかった。

終戦前後の状況

昭和十七年三月には、威鏡^{カンキョウ}北道^{キョウ}清津府^{セイシンフ}の工場に転勤し、そこで八月には長女を出産した。清津は新浦に比べて都会だったし、日本人の居住者も多かった。戦時色が濃くなり、空襲に備えて地蔵ごとにバケツの水運びや、束ねたわら縄で火の粉を消すなどの防火訓練が始まった。五月ごろから物資が不自由に感じるようになった。

昭和十九年三月には一カ月ほど帰国したが、再

び清津に戻った。内地に比べて、清津はまだまだ平穩だなど思ったが、戦争はさらに激しくなり、四月二十九日には主人も召集され、羅南の連隊に入隊した。後に一度だけはがきが届き、フィリピンに向かうらしいことを知ったが、結果的にはそれが最初で最後の便りであった。そのころになると、召集が増えて社宅には男性がいなくなったが、残った女子供がお互い助け合って暮らした。内地では空襲が日一日と激しくなり大変なことを知ったが、清津はまだまだ静かだった。

昭和二十年八月十日、突然ソ連が参戦して生活が一変し、私の人生も激変することになった。空襲が頻繁になり、防空壕で夜を明かす日が続いた。八月十二日、港近くの税関が空襲で大きな被害を受けた。

八月十三日、お盆のお供えにおはぎを作っていたら、京城（ソウル）から帰って来られた工場長の安川さんから、「急用だからすぐ家まで来るように」との使いがあった。行ってみると、「一週

間ほど朱乙温泉シオツに避難するから一時間で用意をして集まってください」と言い渡された。社宅の全員に伝えてから我が家に帰り、母と一緒に避難の準備をした。仏像と位牌、貴重品、食糧、衣類など、当座の物をリュックサックと小さなトランクに入れた。夏とはいえ、夜は冷える。綿入れのネンネも持った。「そうだ、美弥子の写真も持っていないかなければ」と、ふと思いつき慌ててアルバムからはがして袋に入れた。そして、少し残っていたご飯を弁当箱に詰めた。この一膳のご飯が、この後大変貴重な物になった。

一緒に避難することになったのは、安川さんの家族七人、亀井さん二人、西岡さん二人、中村さん一人、吉田さん三人に、我が家の六十三歳の母、私二十六歳、三歳の誕生日を前にした美弥子の三人であった。このときから、長い引揚げの苦難の旅が始まった。

苦難生活の始まり

八月十三日午前十一時ころ安川さんがリーダー

になって清津駅に向かった。幹線道路に出ると、日本人、朝鮮人が入り乱れて駅に向かっていった。荷物をいっぱい積んだリヤカー、柳行李やタンスなど積んだ大八車を曳く人もいた。皆、駅にさえ行けばどこか安全なところに逃げられると思ひ込んでいるようであった。とにかく人の波で、歩くのもやっとの非常事態であった。「駅に行っても汽車は来ない」という声も聞こえてくる。午後一時を回っていた。いつ駅に着けるのか、みんなの気持ちは焦っていた。

午後二時過ぎ、海の方が夜のようになつた。変だなと思っていたら、大砲の音が聞こえてきた。群衆はパニック状態になつた。ソ連軍が清津の海岸沿いにある工場地帯を射撃しているのだ。私たちの朝鮮油脂の工場は、東洋一の設備を誇っていたが、これが一番先に黒煙を上げた。工場長の安川さんが、「会社がやられた」と叫んだ。真っ黒な煙がだんだん近づいてくる。とまどっていたら在郷軍人が「山へ入れ。山へ入れ」と大声

で叫んでいた。私たちはその声に引き寄せられるように山に向かった。海の方では相変わらず砲撃音が響いていた。私たちは無我夢中で近くにあった唐黍畑トウキに逃げ込んだ。そして母、私、美弥子の三人が肩を寄せ合つて震えていたが、気がついたら「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と念仏を唱えていたことをいまでもはっきり思い出す。艦砲射撃は恐ろしかった。

砲撃が静まってきたので、在郷軍人の言つたとおり目の前の山に入った。日もとっぷりと暮れ、雨が降り始めたが雨をしのぐところもない。せめても思い大きな松の木の下に入り、弁当箱に詰めてきたご飯を美弥子に食べさせた。このご飯がなかったらひどい思いをさせたであろう。母と私はいり豆を食べ、水を飲んだ。私はこのときから、いつもご飯は少し多めに炊くことにした。

空がぱつと光る。どこかが空襲されているようだ。雨は相変わらずしとしとと降っていた。夜の明けのを待つ。これからどうなることやら見当

もつかず、不安な夜を過ごした。

翌八月十四日、雨は上がった。みんなと相談した結果、清津は砲撃されているし、山に深入りするのにも物騒だ。とにかくこの駅でもよいから、そこから汽車に乗ろうということになって、清津とは反対の方向にある支線の駅へ出ることにした。六家族の中で吉田さんはおばあさんをリヤカーに乗せて移動していたので、山越えは無理と考えることで別れることになった。私たちは小高い山を越えて駅に着いた。駅名も分からない小さな駅であったが汽車を待つ人があふれていた。話では二時間ほどで汽車が来るといっているので待っていたが夕方になっても汽車は来なかった。待ちわびたが、夜になっても来なかった。仕方なく駅の近くで野宿することにした。当てにならない汽車を待っているも仕方がない、とにかく何かしなければと、安川さんも焦っていたようだった。

八月十五日、歩こうと決めて夜の明けぬうちに出発した。とにかくただ黙々と南へ歩くばかりで

疲労が激しかった。持っていた非常食も少なくなってきた。途中、在郷軍人が大きな釜でご飯を炊いていたので、お米を渡して一緒に炊いても良かった。米を洗うなど悠長なことはしていらなかった。できたご飯をお握りにして食べたが、その美味しかったこと。十三日朝食以来の、お米のご飯であった。一休みして水筒に水を補充して出発した。米が少なくなつた分、背中のリュックサックが軽くなった。お互いに励まし合いながら歩いた。

鉄橋が見えた。この線路づたいに行けば、と希望がわいてきた。鉄橋にさしかかった。大きな川で、鉄橋が二つ架かっていた。橋の中央には幅三十センチメートルぐらいの板が敷かれている。その板を日本人も朝鮮人も荷物を背負って蟻のように進んだ。美弥子はおばあさんに背負われていた。下を見ると水が轟々と流れ、恐怖心で足がすくんだが、ここで弱気を出してはならない、人に遅れてはならないと緊張と不安の連続であった。

鉄橋を渡り終えたときは、さすがにほっとした。

渡り終えたものの、話しかける人もなくまた黙々と歩いた。不安と焦りが疲労をつのらせる。足が重くなりやっとの思いで歩いていた。在郷軍

人が私たちを見て、「命のほうが大切だ。荷物なご捨てろ」という。リュックサックを整理しておぼあさんのトランクを捨てる。少しの米と鍋とお椀が残る。小学生や二、三歳の幼児を含めた十五人が、ただ黙々と二時間ばかり歩いた。後ろから日本軍のトラックが来て、乗っていた兵隊さんが「皆、乗れ。俺たちは羅南まで行く」と手を差し伸べてくれた。五家族全員乗れた。みんな顔を見合わせながら、「神様のお陰」とただうれし涙であつた。

羅南駅に着いたら、駅は大勢の人で大混雑していた。ホームにはすでに列車が入っていた。とにかくこの列車に一緒に乗らなければ、はぐれたらもう一生会えなくなる、そんな不安におびえながら、声を掛け合つて乗り込んだ。小さな子供の手

を引いていた婦人が「困った。この子のお母さんが乗っていない」という。どうしようもない。美弥子は、おぼあさんがすっかり背負っていてくれたので、安心していた。

いよいよ列車が走り出した。隣の人が「私は羅南の駅員ですが、これが最後の列車です。皆さん、乗れてよかったですね」と言ってくれた。この駅員の話では「羅南在住の日本人は八月十日ソ連軍が参戦した日に、元山まで避難しました。この列車はどこまで行けるか分かりませんが、京城に向かう予定です。私たちは家族と合流するため元山で降ります」と話した。

十五日夜、列車は途中機銃掃射を受けたりして、走ったり停まったりであったが、その都度座席のシートを窓に立てかけて防いでいた。夜中に、魚大津ぎょおだいしんに停まった。ここは主人も勤めた工場がある漁村であった。私は疲れていつもうとうとしていた。食糧もなくなったが途中で買うこともできず、ひもじさも度を越していた。羅南を出た

ころに比べて空襲はひどくなっていたが、列車は相変わらずのろろと走っていた。

十六日夜、私が朝鮮での生活を始めた新浦駅に着いた。家々には灯りが点っている。田舎だから灯火管制をしていないのだと、皆で話をしていった。ホームに降りる人もいたが、なんとなく様子が違う。戻ってきた人が、「日本が負けたようだ」と話している。「まさか負けるなんて」と言い出す人もいた。私は半信半疑だった。列車は再び走り出し、二時間ほどで元山に着いた。羅南の駅員は、「この列車は京城まで行くことになりました」と言って降りて行った。安川さんが、この後どうするかと、皆に相談を持ちかけた。安川さんの提案は、「京城には朝鮮油脂の本社があるから当座の生活は何とかなると思うが、食糧は余分がないだろう。長箭^{チャンセン}には会社の大きな工場があり食糧も常備している。われわれが行っても当座の食糧に心配はないだろう。長箭に行こう」ということであった。みんな安川さんの案に同意し、元山で

下車して長箭に向かうことになった。駅前にあった日本人経営の旅館に泊まることになった。旅館の主人に「お客さん、米がないと泊まれませんよ」と言われ、皆持っていた米を全部出して夕食を頂き、やっと布団に入って眠りに着いた。後の祭りであったが、このまま京城に行けば、これからの八カ月の苦しい生活をしなくてよかったのだが、この時には思いもよらないことだった。

八月十七日、朝一番の汽車で長箭に向かって出発した。長箭の工場に滞在して日本へ帰る便を待つことにした。昼前、長箭に着いた。駅頭では、朝鮮人が大勢集まって小旗を振っていた。なぜ朝鮮人が私たちを歓迎してくれているのか分からなかったが、工場に着いて初めて日本が負けたこと、振っていたのは朝鮮の旗だと分かった。長箭工場でも男性は出征していて、残っていた婦人たちが「私たちは今まだ我が家で過ごしているのに、皆さんは大変でした」と私たちのために寮を開放し、衣類などを持って来てくれた。寮の二階

に安川さん一家、私たちは下の部屋にそれぞれ入った。風呂も準備してくれた。家を出てから初めての入浴であった。布団、米から調味料、炊事道具など当座必要な物を倉庫から出してくれた。私のところは年老いた母がいるからというので、銘仙の布団二組をくださった。後で、この布団が私たちの苦境を救ってくれることになる。

引揚げ頓挫、避難生活の始まり

日本人経営の会社や事業所は朝鮮に接收された。今まで日本人が朝鮮人を使っていたのに、立場が逆転した。

八月二十四日、長箭にソ連軍が上陸し、町の大きな工場などに立ち入り、監視を始めた。ソ連軍が上陸して四、五日経ったころ、朝鮮油脂の社宅にソ連兵が五人ぐらいやってきた。寮の部屋で一列に並ばされ、身体検査が始まって金目の物は取り上げられた。私は、腹巻に当座の金と時計を入れていたのが見つかり、取られてしまった。日本の役場が機能しなくなっていたので、日本人世話

会が発足した。ソ連兵から危害を受けないように、日本人は小学校で共同生活をするようになった。私たちも教室で生活することになり、長箭に住んでいる人たちはいろいろ生活用品を持ち込んだが、私たち避難民は、会社で頂いた布団とリュックサック一つだけである。教室に大勢の人が入ったので窮屈な生活であったが、贅沢を言っているときではなかった。不自由な生活は二十日間ほど続いた。

ソ連兵が長箭を引き揚げ、ときどき二、三人が巡回して来る程度になった。共同生活も解除されて、私たち清津組は別の会社の寮に入った。荷物も少ないから、引越しも簡単であった。

生活のために、男性は道路工事や水産会社の仕事に、女性は魚の水揚げ、塩蔵、乾燥などの作業をした。これは村長であろうが、校長であろうが立場は同じだった。こうして働いた賃金は、朝鮮側から日本人世話会に物資で交付され、働いた人々に配給される。配給量は一人あたり米一合、

高粱、大豆かす少々と少ないうえ、配給が不定期だったので心細かった。社宅にいた人も自分の家には入れないので、持ち出すことは許されなかった。

安川さんが朝鮮に残ることになった。安川さんはもともと水産界の権威者であり、日本人の中でただ一人外交官待遇を受けていたほどの方であった。「朝鮮の水産界のために身を捧げたいと思うので、引き揚げない」と朝鮮当局に申し出て、朝鮮の水産庁に勤めることになり、今まで中学校の校長が入っていた官舎に家族が移り、月給をもらうようになった。

治安が良くないので、私たちは転々と住所を変えることになった。私は清津から一緒にきた三家族とは別れ、船大工さんの家族と一緒に住むことになった。

日本人会の指示で、紙巻きたばこを作り女性に売らせることになった。朝鮮側から売り上げ分の食糧を渡される仕組みであった。おばあさんが世

話会から渡された葉たばこに霧を吹き、しっとりしたところでよく伸ばし、細かく刻んだ。私があり合わせの紙をたばこの寸法に切り、刻んだ葉をくるくる巻いて、「紙巻きたばこ」ができあがる。

十本束ねたのが二十銭の値を付けたが、町ではなかなか売れなかった。自分が惨めだと思いう気があったからかもしれない。安川さんが水産庁の人たちに紹介してくれたので、たくさん売れるようになり、私が行くのを待ってくれるようになった。たばこが売れるということは、自分のためと共に、長箭で暮らしている日本人のためにもなった。

三十八度線を越す一回目の船出

昭和二十年十二月のある日、安川さんから連絡があって、私たちのような避難民、病人、妊婦などが三十八度線を越えて南下するために、巡視船が出ることになったと伝えてくれた。

清津の家を出て四カ月、やっと帰国できると準備を始めた。まずお金を工面しなければならな

い。荷物などないので簡単だが、お金はソ連兵に取られて無一文になっていた。たばこを売ったお金は僅かであった。一緒に暮らしていた船大工さんのところへ出入りしているオモニー（お母さん）が、いろいろな品物を欲しがっていると聞いていたので、私は長箭の工場で頂いた布団二組と、炊事道具などお金になる物を全部買ってもらうて、費用を作ることができた。

翌日の夜中、決められた浜に行くと言船が二隻着岸していた。みんな喜んで乗船した。子供たちはすやすや眠っていた。二時間ほど経ったころ、「この船は許可が出なかつたので出港ができない」と船長が宣告した。がっかりして下船したが、金剛山から吹き下ろす風が肌を刺すように冷たかつた。帰るところもないので仕方なく船大工さんのところに帰った。みんな驚いたが、わけを話してまた泊めてもらうことになった。暖かいコタツに足を入れ、親子三人休ませて頂いた。翌日話を聞いた安川さんの奥さんが食糧を届けてくださ

た。

出港できた船に乗っていた方の奥さんが日本に帰って、利根川さんたちがもう一隻の船に乗って帰ったはずだと会社に連絡してくれたらしいが、いつまで経っても私たちが帰って来ないので、家族の者はスミエたちはどこかで撃沈されたのでは、と心配したということをあつとで聞いた。

浮き草生活

身を寄せた船大工さんは長箭の方だから使っていない小さな布団を貸してくれたが、ほかに私たちが持っていた寝具は、清津を出るときに持ち出したネンネコだけで、足をコタツに入れて三人、身を寄せ合つて寝た。

このころから自分で船を手配して引揚げを急ぐ人たちが出始めた。住民が減るにつれて、不用心なので、まとまって住まうように世話会から指示があつて、そのたびに移転しなければならなかつた。世話会から今度入る家を指定してきた。元旅館であつた。いままで世話になつてきた船大工さ

ん家族と、朝鮮油脂に勤めていた方一人との四世帯が一緒に暮らすことになった。旅館だけに部屋数は多く、各世帯別々に部屋が取れた。問題は私たち家族の寝具であった。安川さんが朝鮮油脂の長箭工場に勤めていた朝鮮人に、清津から五家族が避難して来たことや、ここから南下するために乗った船が出港できずに戻って来たので、寝具を何も持っていないことを話したら、「お気の毒です、うちに綿だけあります」と届けて来てくれた。綿だけではどうにもならないと思ったが、部屋にはカーテンが掛かっていたのを外して綿をくるみ、敷布団にした。清津から持って来たネンネコを掛け、心のぬくもりの詰まった敷布団とで暖かい夜を過ごすことができた。

旅館だったので、暖を取るのにコタツはたくさああったが、炭がなかったので炊事の後の消し炭をコタツに入れた。電球がなくて明かりもつかない。清津から持って来たろうそくをつけるが、あまり長くつけていれらるうそくもなくなってしまう

うから、日が暮れば寝るしかない。コタツのぬくもりでうつらうつらするが、三、四時間でコタツの火はなくなってしまう。巻きたばこの残り紙を燃やして消し炭に火をつける。暖かくなると、いまのうちという気持ちで横になる。三歳の美弥子も、寒いのか寄り添ってくる。こんな生活が続いた。

困難な再度の船出

その年、長箭は米不作であった。朝鮮人も食糧に困っていたから、喰いぶちをへらすために日本人が自分で船を雇って、長箭を出て行くことは黙認していた。私たちに二月中ごろ、南下する船があるから何日の夜十時、港に来るようにとの連絡があった。旅に備えて、普段は配給の大豆、高粱、野草などを食べて、大事な米はお握りを作るためにとっておいたが、それを避難時に使った。海上移動は見つかれば銃撃されるので、嚴重な警備の目を避けるために、夜間の、しかも沖合いを航行しなければならなかった。ヤミで雇う小さ

な船での三十八度線越えは相当危険なものであったが、引き揚げるためには覚悟をしなければならなかった。そのうえ、出航にこぎつけるのも大変であった。せっかく港まで出かけても、手違いや警備の目があった、中止になることが再三あった。しかし最初中止になったときの経験から、住まいはそのままにして港に行ったので、中止になっても住まいに困ることはなかった。ただ米はその都度工面しなければならぬが大変であった。心はずませて港に行ったが、今回も駄目だった。

春が近くなった。夕方、浜には朝鮮人の漁師がボンボン船で帰って来る。日本人がバケツを持って魚をもらいに行く。どうせ捨てる雑魚だからといって、小さな魚をくれる。ありがたかった。それを汁にして栄養を摂った。世話会からもらうたばこの売上金は、次の引揚げのときのお米を買うために大切であった。しかし、十分なお米を買うお金はなかなか貯まらなかった。やっと五合のお

米を買うことができたときには、涙が出るくらいうれしかった。

三月に入ったころには、長箭に残っている日本人は少なくなってきた。自分が雇った漁船で引き揚げて行くからである。誰かが帰国したと聞けば、すぐその人の家に行き、残していった日用品、調味料何でももらってくる。マッチ一箱も貴重品であった。恥も外聞もなかった。そうしなければ生きていけなかった。何としても親子三人一緒に日本へ帰ることができなければと心の中は燃えていた。薪もなくなってきたので、使っていない部屋の床板を取り壊したり、とにかく燃える物はなんでも使った。船大工一家とは、引き揚げるときは一緒に帰りましょうと言ひ交わすほど、まるで家族のように親しくなった。

思いがけない訪問者

船大工さんたちと一緒に暮らしていたある日の夕方、「清津から避難して来た、利根川さんの奥さんいますか」と朝鮮の人が訪ねて来た。「ハイ、

私ですが」と言つて顔を見たら、その人は昔主人の下で働いていた人で、安川さんから私がここにいることを聞いたということであつた。「自分は利根川さんにお世話になりました。奥さんがお子さんを連れて不自由な生活をしていると聞いて、餅を作つて持つて来ました」と言うのである。思ひも掛けない人からのご厚意を頂き、ただただありがたく、感謝の気持ちがかみ上げてきた。「朝鮮人が日本人に近寄ると親日派と言われるから、日が暮れてから来ました」と言葉を残して帰つて行つた。頂いたお餅は柔らかく、小豆をまぶしてあつた。いまもその味は忘れぬ。主人のちよつとした心遣いが私たちにこうして返つてきたのだと思うと、改めて人間の生き方を教えられたような気がした。身の危険を冒してまで、困っている私たちを訪ねてくださった朝鮮人の工員さんに接して、人には親切にしなければと思つた。

引揚げが一向に進まない中、コタツに入つて寝ていても、楽しかった清新での生活や、清津から

羅南連隊に入隊した主人がいまどうしているのかなど頭から離れなかつたが、ここでくじけてはならないと思ひ返した。暖かくなれば毎日の生活も楽になろう。野の草も芽吹いてくることだろう。幼い美弥子も何かと不自由な生活の中で、一緒に住んでいる家の小学生のお兄さんやお姉さんに遊んでもらつて満足していた。

脱出の決行

四月二十四日、安川さんから「知り合いの船長に頼んだら、船長から今夜三十八度線の南まで運んであげると承諾を得た。全員に連絡して、船着き場に集合するように」との連絡があつた。各自お握りやモンペの着替え一組、下着などをリュックサックに詰めた。午前零時、教えられた船着き場に行くと、安川さんも来ていた。同じ家で生活した船大工さんたちと、他に二、三組、人員にして十四、五人が乗船した。三十分もしたら船はポンポンと音を立てて動き出した。今度こそ何事もなく三十八度線を越えられますように、と祈るの

みだった。船に人影が見えると撃たれるので、皆船底に入った。狭く細長い部屋に膝を抱えて座った。だんだん船の揺れがひどくなって、船酔いする人も出てきたが、帰れる一心で我慢していた。見張り役の男性が一人甲板にいたが、その男性に缶を降ろしてもらい、その中に吐いた。便意を催す人も出た。また同じ缶を降ろしてもらって、用を足した。命を守ることが第一で、普段では考えられないことであった。

乗船した翌日の夕方、やっと三十八度線を越え韓国領チュウモン注文津に着いた。「無事に着いた」と思うと、うれしくて涙がほほを伝った。ただ、船のチャーター料で行き違いがあった。安川さんは、「私が船長に頼んで料金の話はついているから、貴女は乗船料を払わなくてよい」と言われていたのに、同乗した人たちは私も払うのが当たり前と言ってきた。安川さんの話とは違うと思ったが、ここまででもめるのも困るし、ない訳でもないので、言われるままにお金を払って清算し、注文

津に上陸してここでみんなと別れた。注文津は三十八度線のすぐ南にあり、韓国領であった。それからは、米軍の管轄でその保護を受けることになった。今までの八カ月間の苦しい生活に耐えてきたのも、この三十八度線を越すための苦勞であった。とうとう長箭にいて夢にまで見ていた三十八度線を越えたのである。やっと思いがかなった嬉しきでいっぱいでした。

注文津チュウモン

注文津には米軍がいて、私たち満州から来たという日本人などを近くの寺に連れて行き、各人に缶詰一個を支給してくれた。私たちは早速寺の庭で缶詰を食べた。周りを見れば、みんな野を越え山を越えて来たのであろう、着ている物はポロポロ、女性と分かればソ連兵にいたずらされるので、頭を丸め、顔には墨を塗っていた。私たち長箭での生活の方がまだよかったのだと思った。

注文津から浦項ホコウへの陸路は山岳地帯を行かなければならないので、また船で行くことになった。

今度の船は、米軍が手配してくれた漁船だった。長箭を脱出したときの船より、少し大きくて速力も出た。無事に浦項へ着いたら汽車が待っていた。改札口には米兵がいて、日本人だけを中に入れてくれた。ここから目指すのは釜山であった。

釜山のチビギャング

釜山では、以前日本人が経営していた会社の倉庫で一夜を明かすことになった。かなり広い倉庫であったが各地から集まってきた日本人でいっぱいになった。私たちは、コンクリートの床にムシ口を敷いて寝た。翌朝、食事は米軍が支給してくれた。おばあさんと美弥子がトイレに行ったすぐ後で米兵が来て、「引揚船が入港するからここへ並べ」といわれた。ここまで一度も三人が離れたことがなかったのに、日本を目前にした肝腎なときに、二人がまだ戻ってこない。私はまごまごしていたが、どうしようもない。二人の姿を見つめるのに気を取られていた。やっと二人が帰って来るのが見えたのでほっとして荷物を持つとした

とき、貴重品を入れた袋がないのに気が付いた。貴重品袋には貯金通帳、実印、出がけに慌てて取り出した美弥子成長の記録写真などが入っていたのにと思い、悲しさと絶壁から突き落とされたような気持ちになった。

日本に帰れるうれしさが、貴重品袋の盗難で無一文になったことで、帳消しになったようなショックを受けた。心が沈んでただ呆然としていたときに、十二、三歳から十八、九歳くらいの朝鮮人の子供たちがたくさん入って来た。二人一組になって「いま日本では札が新券になっている。古い札は使えない。取り替えてやる」と、話しかけてきた。その間に他の者が手当たり次第に私たちの荷物を抱えて階段から逃げて行った。やられたと思って追いかけたが、大勢の子供が群がっていたので、怖くなってすぐに戻った。下にいた人たちは、「あれがない、これがない」と騒いでいたが、どうにもならなかった。米兵に「ここに並べ、乗船だ」と言われれば、ぐずぐずしてはいら

れない。私たち三人は、離れないように手をつないで乗船した。

女界灘

やっと懐かしい日本に帰ることができると思うと感慨無量であった。大きな波に揺られながら玄界灘を渡っているとき、ふと主人はどうなっているのか、もし戦死でもしていたら、これから先どうなるのかと不安がよぎった。これまでの苦しさとはまた違う苦しさを味わうことになるのかと思うと、いつそこのまま海に身を投げようかとも思った。しかし、うちに帰ることができれば親兄弟もいる。八カ月の苦勞が水の泡にならないよう、何としても帰ろうと覚悟を新たにした。

苦難を乗り越え帰国

昭和二十一年の四月二十七日博多着。援護会の方々が引揚者の世話をしてくれた。まず行き先までの切符をもらうことになった。博多駅には各都市の空襲による被害情報が貼られていた。高松も相当の被害を受けたようだが、おばあさんと相談

して博多から近いし親類も多いからと、高松に行くことにした。援護会の人から切符と一人二個のお握りをもらった。

博多の駅では女性はモンペ姿の人が多かったが、男性は着物を着ている人もチラホラいたが、多くは軍服姿であった。私たちが乗る列車が入ってきた。胸が躍るはずなのに、なんだか気が重たい。これから先の生活、主人の安否、複雑な気持ちさがそうさせるのだと思った。汽車は闇の中を東へ東へ走った。美弥子も疲れたのであるう、すやすや寝ている。羅南駅を出たときのあの緊張、混雑と違い気持ちは少しゆったりしていた。

空が白んできた。久しぶりに見る緑豊かな日本の景色を珍しそうに眺めている間に広島に着いた。広島は見渡す限り焼け野原。おばあさんと「呉には軍港が、広島には大本営があったので、空襲がひどかったんだね」と話したが、そのとき広島を焼き尽くしたのが原子爆弾とは知る由もなかった。後に二、三時間もすると高松に着くのだ

と思うと、言いようのない気持ちになった。瀬戸内海の景色は昔と変わっていなかった。

岡山から列車を乗り継いで宇野に着いた。そこから宇高連絡船に乗った。連絡線は美しい島々の間をぬって静かな海を進み、約一時間で入港の汽笛が鳴る。乗客はそれぞれ下船の支度をした。私はリュックサックを背負って美弥子の手を引いて、三人で高松の土を踏んだ。

高松築港駅のすぐ前で、どちらに行けばよいかとあちらこちら見回していたら、ふと「榮楽旅館」という看板が目に入った。間違いではないかと自分の目を疑って、もう一度見直したが間違いがない。「榮楽黒川さんのところが残っている」胸が躍った。黒川さんは私の母の友達であった。私は急いで旅館に入った。旅館の人たちはみすばらしい私たちを見ていたが、その中の一人が「あら、スミエさんじゃないか。あんた、よう帰って来たな。日本では朝鮮にいた年寄りや子供はみんな死んだと噂していたんやよ。あんたの兄さんが

いま三十分くらい前に帰ってきたばかりや。兄さんの話では功さんはフィリピンから帰って来て新潟にいるそうやで」私はその場に泣き崩れた。

一番心配していた主人が無事で帰っていたとは、思いもしなかった。避難の途中、艦砲射撃を受けて恐怖で三人が抱き合ったときは違って、安心とうれしさに強く抱き合ったままうれし涙が止まらなかった。ひと休みさせて頂きながら、親戚、知人の様子を聞かせてもらった。積もる話は山ほどあったが、私たちの仲人でおばあさんの親戚でもある福家さんを訪ねたかったので、一時間ほどでおいとました。元住んでいたところは空襲で焼けて引っ越したと聞いたので、引っ越し先を探して歩いた。やっと見つけたときは、夕方になっていた。福家さんも、私たちが無事帰って来たのにびっくりしていた。一夜の宿をお願いして、主人が新潟に引き揚げていることをお話した。早速電報を打って、迎えにきてもらうことにした。

主人との再会

四月三十日、新潟から主人が福家さんのお宅に迎えに来た。昭和十九年四月二十九日出征以来、二年ぶりの主人との再会であった。主人は栄養失調で体はむくみ、マラリアのせいで黄ばんでいた。美弥子はお父さんを忘れたのか、お兄ちゃんと呼ぶ。「違う。美弥子ちゃんのお父さんだよ」と教えたら、しばらく眺めていたがそのうち「お父ちゃん」と言いながら懐に飛び込んだ。

主人もフィリピンで終戦を迎えたときは、生死の境をさまよったと聞いた。翌日、おばあちゃんのもう一軒の親類、泉保さんを訪ねて積もる話をし、四人一緒に新潟へ帰る旅について。

激戦の地どより還りし

夫がいて

我が引揚げの家族迎える

新潟から小樽での生活

ようやく日本に帰ることができ、案じていた主

人が先に帰国していたことで、これから先の生活も何とかなると希望がわいてきた。しばらく新潟で農業を手伝っていたが、現金収入を得るために、主人は友人の紹介で青海町の会社に勤めることになったので、糸魚川に転居した。

長箭でお世話になった安川さんから、日本に引き揚げたという電報がきたのが昭和二十一年九月であった。かねて、お互い元気に日本に帰ることができたら一旗揚げたい。そのときには、ご主人にぜひ片腕になってもらいたいと言われていた。

主人は早速上京、打ち合わせをして小樽での水産会社設立の準備に掛かった。十一月には私たち家族も小樽に移り、人生の再出発が始まった。朝鮮油脂時代の人たちにも声を掛け、公的融資も受けて漁船四隻を新造するなど、準備は着々と進んだ。社員の中には独身の人や遠く九州から来ている人もいたので、寮も建て、私は賄いを担当することになった。物資不足の折で十余人の世話は大変であったが、みんな苦勞して引き揚げた人ばかり

りだったから、何の不平もなく和やかな生活であつた。

昭和二十二年には利尻の営業所長として転勤、同年八月に次女、二十六年五月に長男が生まれた。冬の利尻は雪もひどく厳しかった。清津も寒かつたが雪は降らなかつた。春にはニシン漁が始まつた。初めて見るニシン漁の活気あふれる様子は、ただただ驚くばかりであつた。最盛期には村中総出で学校も休みになるほどであつたが、数年後どういふ関係か漁も少なくなり、利尻もだんだん寂れ始めた。子供の成長につれて、教育のことも考えなければと思つていたとき、戦前関係していた会社から東京でフィッシュミール製造事業を起こすので来てほしいと頼まれ、三月に島を離れた。

東京に来てすぐ、長女は東京の私立高等学校に入学した。主人はミール工船に乗つて北洋に出漁した。主人が出漁中は、女子供が心を合わせて生活した。昭和三十四年横浜に移つたが、子供たち

も立派に成人して良い伴侶に恵まれて幸せな家庭を営んでいる。主人は五十五年に他界したが、私は孫七人、曾孫三人に恵まれ、また友人も多くコーラスに通うなど、感謝と友愛の心を忘れることなく毎日元気に過ごさせて頂いている。引揚げの試練が、人生に大きな力になつたと思つている。中国などから戦争孤児が来るたびに、自分たちが家族揃つて帰ることができた幸せを、もつたにないかと思つた。私のような苦勞は微々たるものかもしれないが、戦争ほど人々を傷つけるものはない。

世界の平和を祈ります。